

第一話 出会い

一

あの夏のことを、今でも思い出す。出会いは春だった。四月の初め、高校二年のクラス替え。その年は桜が早くに咲いていて、その頃にはもう半分近く散っていた。

山下勇人(やましたはやと)、その時の僕は十六歳。身長百六十センチ、体重九十キロちよつと。丸顔で童顔で、学校の体育以外まともにスポーツもやったことがない背の低い太った体型。本を読むのが好きで、休み時間は大抵、古本屋で安く買った文庫本を開いていた。友達がいらない訳じゃなかったけど、にぎやかなグループの中心にいるタイプでもなかった。それだけなら、まあ、“普通”の高校生だ。でも一つだけ、普通じゃないことがあった。

それは、男が好きなことだった。

二

新しい教室に入ると、出席番号順に席が決まっていた。廊下側から二列目、前から四番目。目立たない場所だった。まあ悪くないか、と思いながら鞆を置いて、本を取り出した。

そのとき、前の席に誰かが座った。どすん、という音がした、文字通りに。振動が伝わってきた。

思わず顔を上げると、目の前に一人の男子生徒が座っていた。カーキ色の大きなリュックを前に抱えたまま周りをキョロキョロと見回した後、こちらを振り返って言った。

「よろしく」

にっこりと、笑顔で。

大きかった。座っている状態で、僕より頭一つ分は背が高かった。髪型はラグビー選手みたいな短髪で、きちんと整髪料で整えてあった。見た目に似合わない柔軟剤の良い香りがした。一目見て、僕みたいに太っている人なのかとか思ったけど、よく見ると筋肉で膨らんでいるようだった。顔は身体のサイズに比べると少し幼くて、笑うと可愛らしく目が細くなった。

「あ、うん。よろしく」

急に話しかけられて面食らった。

「山下、だっけ。俺、村上隆太（むらかみりゅうた）」

「村上くん」

「隆太でいいよ。名字で呼ばれるの、なんか他人行儀な感じがして」

まだ他人だけどなあ、と思ったけど何も言わなかった。

「じゃあ、隆太」

「おう」

隆太はそれだけ言うと、また前を向いて、ちょうど話しかけてきた他の男子生徒と話し始めた。



僕の通っていた高校は一年生の生徒数が多く、入学して一年経っても見たことのない同級生なんてさらにいた。あまり交友関係を広く持たない僕は特にそうだった。隆太については、その時はただ、でかい人だなと思った。それだけだった。本当に、それだけだった。

隆太が重量挙げをやっていると知ったのは、その日のホームルームだった。担任が「自己紹介をしてもらおう」と言って、一人ずつ名前と部活などを言っていた。

隆太の番。

「村上隆太です。ウェイトリフティング部です。食べるのが好きです。よろしくお願いします」

それだけ言って座った。なるほど、と思った。百七十八センチ、百十五キロ。あとから聞いた数字だけど、座っているだけであれだけ存在感があるのはそういうわけだ。ラグビー部とか柔道部あたりだと思っていたけど。うちの学校にウェイトリフティング部があることすら知らなかった。

僕は真後ろから、背筋を伸ばして座る隆太の背中を見ていた。少しサイズが小さいのか、白いワイシャツがピッチリと肩や腕に張り付いている。脂肪もあるけどそれ以上に筋肉もある身体。

僕は脂肪で膨らんだ自分のお腹を思わず見下ろした。隆太みたいにワイシャツがピッチリと張り付いている。中段付近のボタンが苦しそうに左右に引っ張られていた。僕はポンと小さく自分のお腹を叩いてみた。

・・・まあ、それはいい。

「じゃあ、次。山下」

担任に言われて立ち上がり、僕は自己紹介を始めた。

それからすぐに、隆太とはよく話すようになった。昼休み、本を読んでいた隆太が声を掛けてきた。

「それ、面白いの？」

顔を上げると、隆太が椅子を逆向きにして座って、手元の本を覗き込んでいた。小学生が不思議なものを発見した時のような、純粹そうな顔をしていた。

「まあ、そこそこ」

「どんな本？」

「ミステリー」

「へえ」

隆太は本のタイトルを見た。すぐに興味なさそうな表情になったけど、話は続けたがつているみたいだった。

「勇人って、本ばっか読んでるよな」

気づけば、隆太は僕のことを下の名前で呼んでいた。

「好きだから」

「俺、本苦手なんだよな。字読んでるとしゃっくり出て来るんだよね。漫画はいけるんだけど」

「漫画も本だよ」

「そうなんか？」

ちよつと天然だな、と思った。あと、感情が顔に正直に出てしまう人なんだなと思った。

それから、しばらく話した。大した話じゃなかったけど。漫画の話、授業の話、昼飯の話。隆太はずっと楽しそうに話していた。こっちが短い返事をして、勝手に話を広げていった。

話しやすい人だな、と思った。それだけだった。その時もまだ、それだけだった。

三

多分、僕の中で何か動き始めたのは、それから数週間ほど経った放課後。桜はもう完全に散って少し葉をつけ始めていた頃だった。

休み時間に読んでいた小説の続きが気になって、帰りのホームルームが終わった後も教室に残って一人で本を読んでいた。区切りのいいところまで読んで、そろそろ帰るか、と教室を出たところで隆太とぼったり会った。

「お、勇人じゃん。今から帰るん？」

「うん」

隆太は水色のTシャツに黒のハーフパンツを履いていた。手首に赤と黒のバンドみたいなのを巻いていた（“リストラップ”というらしい。後に隆太に教えてもらった。）

「部活ないの？」

「入ってない」

「そうなんか」

「…隆太はどうしたの？忘れ物？」

「ん？ああ、そうだ。ロッカーにさ、膝のサポーター置いたままだったんよね」

そう言って教室の後ろの自分のロッカーまで行き、中から黒色のサポーターを取り出した。

「あった、あった」

そう言うと、隆太はこつちを振り返った。少し微笑んでいるように見えた。そしてゆつくりとこちらに近づいて来て、自分よりも二十センチ近くも背の低い僕の頭にポンと掌を乗せた。

「勇人って、なんか年下の弟みたいでかわいいな」

え？と思った。隆太の手は僕の頭に乗ったままだった。

「同じ年なんだけど」と僕は隆太の手をつかんで頭から降ろさせながら言った。

「わかってるけど、なんかそんな感じする。お餅みたいに丸いし、なんというか、ゆるキアラみたいな」

今度ははつきり笑いながら隆太は言った。悪意は全く感じなかった。純粹にそう思っているだけのようだった。

僕が何も言えずに固まっていると、なんでもないような感じで「やべ、行かなきゃ。じゃあな」と言って隆太はトレーニング場の方へと駆けていった。

僕はしばらくそのまま動けなかった。

年下みたいでかわいい
ゆるキアラみたい

自分の顔が熱くなっているのがわかった。触れた隆太の手の温かさがまだ掌に残っていた。

こういう感覚は知っている。もう体験したことがある。

中学の頃だった。

クラスの男子たちが“普通”のＡＶの話で盛り上がっていた。誰々の胸がどうとか、誰々の顔が可愛いとか。みんな楽しそうだった。

僕は全く興味が湧かなかった。愛想笑いをしながら、心のどこかで「なんでそんなに盛り上がるんだろう」と思っていた。おかしいのは自分の方だと

は、その時はまだ思っていなかった。いつか僕も興味を持つんだろうな、ぐらいにしか思っていなかった。

その考えが変わったのは、ある日の放課後だった。仲のいい男友達数人とじやれ合っていて、身体の大きな一人に、何かの拍子にハグするような、相撲で取っ組み合うような形になった。同級生の男子の体温を全身で感じた。

その瞬間、心臓が跳ねた。本気でドキドキした。

相手は何も気にしていないみたいだった。だから、こっちも何事もなかったような顔をした。でも家に帰ってから、その時の相手のことばかり考えていた。

夜、なんとなくスマホで検索してみた。そいつに似た体型の男の写真を探した。肥満気味の身体の大きな男性。気がいたら、ゲイのＡＶが画面に映っていた。

最初は驚いた。でも、見るのを辞められなかった。二人の男が抱き合い、愛の言葉を語り合っていた。

僕はその動画を見ながら、そのまま初めて自慰をした。終わってから罪悪感でいっぱいになった。背徳感というか、自分がひどく汚いものになった気がした。スマホの履歴を全部消して、布団をかぶった。でも、我慢できなくてまた見て、また自慰をした。それでまた罪悪感を感じた。自分がおかしくなったと思った。

それを何度も繰り返すうちに、少しずつ受け入れていった。罪悪感が残ったまま。自分はそういう人間なんだ、みんなとは違うんだと。

でも気づいたら、その同級生のことで頭がいっぱいになっていた。それから僕は、“友達”の皮を被って、その子に近づき腕や手に触れた。いつの間にかその子は、僕のいるグループとは違うグループの奴らといることが多くなっていった。きっと僕のことを避けていたんだと思う。きっと、僕のことを気持ち悪いと思っていたんだと思う。本当はどう思っていたかわからないけど。

男は“普通”は女性の裸を見て興奮するものだど理解したのもこの時だった。ゲイとかホモとかそういう言葉を知ったのもこの頃だったと思う。ノンケという言葉も。

正直今でも、負い目みたいなものを感じている。誰にも言えるわけない。言う気もない。ただ黙って、“普通”の顔をして生きていくしかないと思っていた。

ずっとそうしていくつもりだった。

昇降口を出ると、生温かくてぼーっとするような春の風が吹いた。地面に落ちていた桜の花びらはもう全部茶色くなっていた。

また同じことが始まるのか、と思った。隆太は絶対ノンケだ。クラスの女子と楽しそうに話しているのを何度か見た。他の男子生徒と女性のAVの話で盛り上がっているのを聞いた。

絶対に僕に振り向くことはない。

わかってる、わかってるけど…

くしゅんっ、とくしゃみが出た。花粉だろうか。胸の中で何かがざわついたまま、僕は一人で帰り道を歩きだした。

今思えば、これが始まりだったんだと思う。あの“かわいい”の一言が。

